

結婚生活 山田智彦



三笠書房

結婚生活

山田智彦

三笠書房



目次

葡萄棚

7

般若の面

91

南京街

113

結婚生活

151

あとがき

229

装幀 三谷茉莉沙夫

表紙・扉

ジョルジュ・スーラ

「グランド・ジャット島の日
曜日の午後」(1884~86)部分

結婚生活

葡萄棚

一

倉田家の庭の一隅には古い葡萄棚があった。倉田氏を訪ねる度に、私は庭に眼をやって、そのくすんだ緑色の葉と、しなやかに伸びているつるを眺めた。

陽当りがよくないせいか、葡萄棚の下はほの暗く、秘密めいた匂いがあった。

私はそこに青い房がたれさがっているのは見たが、その実がみのりの秋を迎えて、紫水晶のように輝くのを眼にすることは出来なかった。

倉田氏は私にとって不思議な人だった。

私は最初から氏を尊敬していて、恩師に対するような敬愛の念と好奇心を抱いた。

倉田氏との短いつきあいのなかで、私はどれだけのことを学んだのか、今ではよくわからない。その人が亡くなった時、私が失ったものは言葉では言いつくせない、なにかであった。

倉田氏は私が学校を出て、すぐ勤めた銀行の支店長をしていた。

私がL大を出た時はひどい就職難で、私が専攻した文学部の出身者たちには、まったく就職の道が閉ざされていた。もっとも私たちは英語か国語、社会科などの教師の免状をもっていて、中学か高校に就職した。

田舎へ帰って父親の商売をついだり、いつ倒産するかわからぬ中小企業の事務員になったりした者たちからみれば、私は恵まれていたかも知れない。叔父の知人の紹介で、畑違いとはいえ、とにかく銀行に就職出来たのだから……。

その日、私は本店の人事課に出頭して、一枚の辞令を受取り、Y支店勤務を命ぜられた。正午近く、私はY支店に来て、応接室に通された。

お茶に手を出そうとして、ふと眼をあげると、支店長が扉を押して入ってきた。

私は立上って、背の高い、頑丈な、しかし色の白い、ハンサムなその人を見た。

私は何故か頬が火照るのを感じた。その人のやわらかなものごとと快活な口のきき方に私はふっと心がなごむのを覚えた。同時にこれでいいのだろうかという戸惑いが少しずつひろがってくるのをおさえられなかった。

その人につれられて行内を案内され、支店長代理と係長に紹介された。

「水島君はぼくの後輩だよ、L大のドイツ語を出たんだって、異色の新人だから、ひとつよろしく頼むよ」

そういう紹介の仕方が私にはことのほか有難かった。私は疲れていて、他人が示すわずかな

好意にも、侮蔑にも敏感になっていた。

そのせいか、私は倉田氏の好意を殆ど信じた。氏のものの言い方には妙に人なつこい、甘さが含まれていて、私は率直にそれを受取った。それどころか私はもっとあまえかかりたいような気持になっていた。そのために、私はこの職場での仕事に望みをもつようになった。

どんな仕事を与えられようと、私は働かねばならなかった。私は学生時代から続いていた不幸な恋愛を終わりにしたいと思っていた。就職して、一人を養わねばならなかった。

そういう気持がなければ私はまだまだ学校に残って、ドイツ文学にとり組んだまま机に向う生活を送っていたに違いない。割りきったつもりで気持がささいなことでも崩れそうになった。

私が誰かを頼りたい気持になっていたのは確かだし、それでなお倉田氏にひかれたのかも知れなかった。私の中にある打算、職場の上役に好意をもたれる結果の何らかの特典、それを当てにしようとする気持は、もちろんあった。しかし、私はむしろそれを否定したい衝動にかられる。もし、私自身、誰の力をも必要としない時でも、私は倉田氏にひきつけられてゆく自分を見出すだろう。そんなもってまわった言い方をしなくても、私は何時氏に出会っても、すぐ好きになってしまっただろう。

翌日から出勤すると、私は最初に支店長を探した。ただ何となく氏に会って、その視線を受け、頭を下げたかった。ところが、氏が皆の挨拶を受け流しながら、どっかりと支店長席に坐ってしまふと、とても近付けなくなった。

十時を過ぎると、支店長は各係を廻りはじめて、二階の私の席の方に歩いてきた。私は下を向いて氏をやりすごそうとした。と、氏は空いている私の前の席に腰を下ろして、私の読んでいる銀行の規定集を覗いてきた。

「きみ、慌てなくてもいいよ」

と氏は言った。

「まだ当分学生気分のままでもいいからね、うちの銀行も大きくなったから、君に勉強してもらう時間はあるよ。ぼくが入った頃はきびしかったからね、ぼくは一晩で規定集を読んで、翌日は銀行の仕事の流れを全部頭にいれたもんだけどね、そんなまねをするとかえってだめだね、覚えることがなくなって幻滅を感じちゃうからね、もっとも、その後、ぼくらがつくって、つけ加えた規定もかなりあるけどね」

言うだけ言うと、氏は立上って一階の営業室においていった。

私は規定集をもちなおし、要点をメモしながら真剣に読みはじめた。三百ページ近い分厚いもので、とても一晩で読みきれぬ量ではなかった。

氏に感じられる近づきがたさ、たぶんそれは氏のすぐれた資質が人と人との安易な、なれあいを拒否するせいだろう。

けれども、それならばなお、私は氏に近づかなければいけない気持になった。

こういう気持がどこからくるのかわからなかったが、何か私の中に強く氏を求めてやまない

ものがあって、それが私を一種せつないほどの気持にさせていた。

勤めはじめて、一週間たないうちに、私は自分がこの仕事に向いてないのを痛感した。怖れが本当になった。今迄は気持の上での怖れだった。それが今は現実の問題になって、与えられた仕事の一つ、一つが重石になった。

私は得意先係に配属された。この係りはいわゆる外廻りと称されている係りで、およそ銀行員という觀念からは遠い仕事をしていた。百軒から百五十軒の顧客を担当し、預金や積金を勧誘し、日掛や月掛を集金して歩くのだった。ちょっと気をゆるめれば集金が遅れ、苦情が出て、集金率が下った。何を言ってもお客にとりいつてゆき、あわせて新規開拓をしなければ、割当られた預金や掛金の契約数字を達成出来なかった。九時半に銀行を出て、昼食時間もそこそこにして駆け廻り、五時過ぎなければ帰れなかった。帰ってからの入金処理や台帳への記帳に一時間はかかったので、退行はいつも七時頃になった。

肉体的な疲労が強く、家に帰って風呂に入ると、なにも出来なかった。無理に本を読もうとしても、二ページ読まないうちにうとうとと眠りこけた。眠ってもお客にいじめられたり、重大なミスを犯したりした夢を見て、夜中に大声をあげた。毎朝のように、枕カバーには何本もの抜け毛とよだれのしみがあった。

ある日、私は鞆をもって出掛けようとしたがどうにも気が進まなくて、立上れず、九時半が十時になった。二十人ほどの同僚たちはそれぞれ自分の担当地区を目指して出て行った。

たぶん、私はぼんやりして窓の外などを見ていたのだろう。ふと、気付くと支店長が私の後ろに立っていた。私は慌てて鞆を持ちなおして、出てゆこうとした。

「ほら」

と倉田さんは言った。

「嫌いじゃないだろう」

氏はポケットから出したチョコレートを二枚すばやく私の掌にのせた。

「外の空気は喉に悪いから、それでもしゃぶると楽だよ、いいかい、みんな一度は渉外の仕事をやってきたんだから、がんばってくれなくちゃいけないよ」

電車通りを横切りながら、私は氏の言葉を反復した。そして少し、恥ずかしくなった。

氏は私を無能だと思ったかも知れない、そう決めると、私はたまらない気持になった。

私にも銀行内部の事情が少しばかりわかってきた。氏は全店で最年少の支店長であり、支店内での信望の厚さはたいしたものだった。Y支店の業績は倉田支店長になってから急激に伸びはじめ、今では全店で一、二を争っていた。氏自身は銀行経理畑のかんりの理論家で、金融関係の新聞雑誌類にユニークな金融論を何度も発表していた。

私にも、現在の氏のアウトラインがわかりかけてきた。氏の銀行内での存在が大きければ大きいほど、氏と私との距離が逆に、離れれば離れるほど、私は氏に無視されたくないという気持が強まるのを感じた。

規定集どころか、私は金融論から手形小切手法、一般経済の解説書まで読みあさった。氏の知識の何十分の一でも持っていないければ、口をきいてももらえないと思った。

一カ月ほど過ぎたある帰り、駅のホームに立っていると、後ろから不意に肩を叩かれた。柱の向うに本を二冊手にもった倉田氏が微笑をうかべていた。

「きみが来るのを待っていて、電車を三台もやりすごしたよ、毎日帰る時間に帰らないと奥さんがうるさいからね、今度のは乗って行くよ」

そう言うとき、氏は手にした書物のページをぺらぺらとめくった。

電車がホームに入ってきて来ると、

「ぼくは遠いから坐って行くよ」

と氏は言った。

私の挨拶を受け流すと、何気ない調子で、

「そうだ、今度の日曜日、あいてる？ あいてたらぼくの家に行らっしゃい。ほら、名刺の裏に地図を書いたよ」

それだけ言って、たちまち車中の人になった。

私はこみあげてきた嬉しさを踏みしめるために、靴底で何度もホームのコンクリートを蹴った。氏と私の間に横たわっている無限の距離が急にちぢまったような気さえた。しかも手は氏の方からさしのべられたのだ。そう思うとき、せまいホームを短距離走者のように駆け出して

行きたい衝動にかられた。

私はわざと電車に乗らなかった。本当に支店長が私を待っていて、三台もやりすごしたのだろうか。本当のようにも思えたし、ただ私をからかうためにそう言っただけのようにも思えた。それにしても私を自宅に招待したのに変りはなかった。

雨が降った日曜日、私は一時過ぎに倉田家に着くように家を出た。雨は午後になるとひどくなった。

低い門の右側には薔薇が大輪の花をつけていた。急にためらいの気持が起った。相手はお前など何とも思っていないのだ。それなのにお前は上役にとりいろいろとして、雨の中を尻尾をふってやってきたのだ。そう思うと、綺麗な真紅の花が憎くなった。自分の中に支店長に氣にいられたという気持があるのを否認なかった。私はそのまま門の前に立っていた。なめらかな花びらの上にたまった水滴がたまりかねたように落ちた。

私は思いきって呼鈴を押した。

「やあ、待ちくたびれたよ」

そう言われて、応接間に通されてみると、今の今まで私の中にくすぶっていた、わりきれない気持はあとかたもなく消え失せていた。

黒縁の眼鏡をかけた奥さんが音もなく近寄ってきて、

「あら、パパの後輩、よくいらしたわね」